

黒羽芭蕉の館だより ⑪

奥の細道シリーズ切手(1)

このたび、市内にお住まいの伊藤武治氏から当館に「奥の細道シリーズ」の切手シート20枚(昭和63年発行)が寄贈されましたので、今回から何回かに分けて紹介します。

「奥の細道」の旅程に沿って、旅情を誘う絵と芭蕉の名句が配されており、第1集から第10集まで2枚ずつで、計20枚となっています。第1集は千住から日光までで、以下、第2集



奥の細道シリーズ切手 第1集 千住〜日光

那須〜芦野、第3集 須賀川〜福島、第4集 仙台〜平泉、第5集 尾花沢〜立石寺、第6集 大石田〜月山、第7集 象潟〜出雲崎、第8集 利伽羅〜金沢、第9集 那谷〜敦賀、第10集 種の浜〜大垣という構成となっています。

第1集の1枚目は、小川破笠(江戸時代中期の漆芸家)が描いた松尾芭蕉の肖像画と、芭蕉の句「行春や鳥啼魚の目は涙」です。この句は、行き過ぎる春を惜しむように鳥の鳴き声は哀愁に満ち、魚の目にも涙が見える、という意味で、季語は「行春」です。いつ帰るとも知れぬ漂泊の旅に出るにあたって、芭蕉を送る人々との惜別の情が示されています。

2枚目には、中禅寺湖と華厳の滝の絵および芭蕉の句「あらたふと青葉若葉の日の光」が記されています。句意は、ああ尊いことだ、ここ日光では日の光に青葉若葉が輝いている、となります。季語は「若葉」で夏です。「日の光」は太陽光線を指すとともに、「日光」という地名を詠みこんで、日光東照宮の威徳に対する賛嘆の気持ちをこめています。

現在、当館の芭蕉展示室において、これら切手シートを展示していますので、ぜひご覧ください。

問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

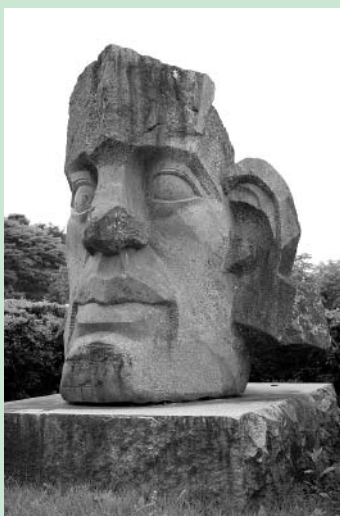
彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 24

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は、ふれあいの丘に入ろうとするときに、その入口で皆さんをいつも出迎えてくれる、大きな人の顔の形をした彫刻です。



大きな耳のついた顔

目、鼻、口がしっかりと彫り出され、側面にはタイトルが示すとおり大きな耳がとりついています。くつきりとした彫りにどっしりとした重量感も加わって、とても存在感がある作品になっています。まだ20歳代であった作家の若き時分のエネルギーが伝わってくるようです。

うちやま しろう 内山 士郎 2000年

「子供の頃、よく近くの雑木林で虫を採ったり、野原で遊んだり毎日が色々な発見で、わくわくしながら一日、一日が過ぎていった」という作者が、「自然の中で身をゆだねている石(自分)とで常に共鳴しあい、自然の中で生きていることを実感していきたい」という気持ちをもって作り上げた作品だといえます。



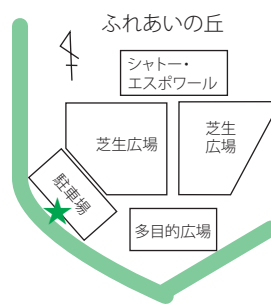
内山 士郎 氏

作者は、1972年埼玉県生まれ、在住の内山士郎氏。1998年に東京藝術大学美術学部彫刻科を卒業、2000年に同大学大学院を修了し、2004年まで

同大学美術学部彫刻科の非常勤助手を務めました。

新潟県十日町市石彫シンポジウムに参加したほか、国内では東京・千葉・埼玉・茨城、海外では韓国やメキシコで開催された展覧会にも出展しています。

設置場所案内図(★印)



問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718